

青年期の自我同一性における「社会からの承認」の意味について（2）

P. リクールの「自己同一性」の概念との比較、及び「倫理性」を中心に

On the meaning of "social approval" in adolescents' ego-identity (2)

: Focusing on comparison with Ricoeur's concept of "self-identity"
and "ethics"

久保田 まり

目次

はじめに

1. エリクソンの自我同一性概念における「斉一性」「連続性」と「社会からの承認」
2. リクールの自己同一性概念における「同一性」「自己性」について
3. 「自己性」の維持としての「約束すること」
4. 他者に関かれ他者に「応答する」ことと、自己同一性の倫理的次元
5. 自己確立における他者と倫理性

おわりに

はじめに

本稿では、一般的には青年期の心理社会的発達の主眼とされている E.H.エリクソン(1902～1994)の「自我同一性(エゴ・アイデンティティ)」概念と、P.リクール(1913～2005)の「自己同一性」概念に着目し、自分らしさの探究と確立をめぐる分野の異なる二者の概念比較によって、発達心理学の範囲での「自我同一性」の概念にリクールの概念を照射することで、自我(自己)同一性の問題、特に他者(性)や社会が与える影響の内実の理解を深め、その地平を拓けることを目的とする。また、二つの概念に内包される「倫理性」についても考究する。

以下は、主としてエリクソンの著作『アイデンティティとライフサイクル』(1980/2011)と、リクールの著作『他者のような自分自身』(1990/1996)に沿って内容を確認・検討しつつ、論を進めていく。「」内は、その語がエリクソンやリクールが著作で述べている意味で用いていることや、引用文献の引用部分であることを示し、引用の場合に

は前述の各著作の当該ページを記している。“ ”内は、筆者が文章中で強調したい語や文章であることを示す。

1. エリクソンの自我同一性概念における「斉一性」「連続性」と「社会からの承認」

エリクソンによる、青年期の発達課題、あるいは青年期における「相対的な心理・社会的健康の基準」として挙げられるのが「自我同一性(の確立)」である。端的に言えば、“自分らしさ”や“自分らしい生き方”の確立であり、成人期に至るまでに求められる心理・社会的な自立(自律)を意味する。

エリクソンによれば、自我同一性を構成するのは「斉一性」の感覚と「連続性」の感覚であり、この場合の「感覚」とは、普段はあえて意識はしていないが、感覚的に実感できるレベルのものを意味する。

「斉一性」とは「自分がまとまりのある一つの身体的・心理的全体であり」「誰ひとり、同じ人はいない、唯一の存在である」という感覚である。即ち、日々の現実においては、交流する相手や状況、諸々の問題解決場面や役割によって様々な「自分」の側面が表出され機能するものの、それらをコントロールしているのは“ただ一人、この自分”(私の自我)であり、個々の状況を越えて一貫している“この自分”である、という感覚(普段はあえて意識はしていないが、感覚的に実感できる)を意味する。また、「連続性」の感覚とは、身体的・心理的存在としての“この自分”の「時間的連続性」を意味する。即ち、「誕生時から今現在に至るまで、私は同じ存在であり、未来においても同じ存在であり続ける」という感覚である。

以上の「斉一性」と「連続性」は、自我を統一する秩序であり、これらは時空間を越えた確固たる心理・社会的な“存在の一貫性”を保証している(むしろ、これらの感覚の根源的欠如や希薄感は、同一性に関連する何らかの精神病理を意味することとなる)。

このような内的統一感、唯一無二の自分らしさ(自分らしい生き方)の確立の土台となり得るのだが、しかし、エリクソンは、それが真に可能になるのは、自分にとっての重要な他者や所属する社会からの「承認・是認」を得た時に限られると述べている。

ここで、この「社会からの承認」の意味について、エリクソンの記述を確認したい。

青年期を待つまでもなく、幼児が＜身体を自由に動かせるようになること＞を初め、発達に応じた様々な達成に対するその都度の子どもの喜びが、周囲の他者からの承認や喜びと一致する時に、その子どもの内に初めて自信・自尊心が育つ。このように形成される自尊心は、やがて、青年期になるにしたがって、属する集団の未来に向かって自分が確実

に歩を進めている実感や、自分は社会的現実の中での明確な位置づけを持った存在として発達しつつあるのだ、という確信へと深まっていく、とエリクソンは述べている(p.7)。つまり、自己の「斉一性」と「連続性」、即ち、“過去から現在まで、そして未来に向かって歩いていく、一つの固有のまとまりを有する自分”の存在は、周囲の他者から受け容れられ、承認されることを通して、現実感を伴う真の自我同一性として確立されることが示されている。

同様に、エリクソンは、青年の自我同一性について、その自己確立の達成の仕方が、「属する文化の中で意味を持ち、それに対して(社会からの)心からの一貫した認識を受けることによってのみ、本物の強さを得る」(p.96)と述べており、文化や所属する社会・共同体にて、その青年の生き方が“意味を持つ”限りにおいて、そして、それが周囲から一貫して理解され承認されることがなければ、自己確立は脆弱であるか、独善的になることを示唆している。

また、エリクソンによれば、「若者は自らが誰かのために最も意味を持つ場所においてこそ、最も自分自身である」ことを学ぶ必要があるのであり、その誰かとは「この若者にとってもっとも重要な意味を持つようになった他者のことである」(p.112)としており、重要な他者(家族、友人、恋人、同僚など)と共に、他者のために生きる時に、自分らしさの真の深まりに至ることを指摘している。

加えて、他の部分でエリクソンは、若者が「子ども期の同一化を、新しい種類の同一化に従属させた時」に初めて青年期の発達過程が完結する、と述べ、この新しい同一化は、「社会性を身につけ、同じ年代の若者たちと共に、競争的な徒弟期間を過ごす中で達成される」としている(p.124)。つまり、新しい種類の同一化とは、子ども期の同一化を、その若者が生きている時代からの「歴史的要求、社会的役割に一致するように再統合し、配列しなおす」こと、即ち、周囲の期待・要請、社会から求められる役割・目標に向けて歩む方向を定位しなければならないことを意味している(仁科、1983)。

このようにエリクソンは、青年期の同一性確立においては、所属する社会への適応をかなりの程度、重視しており、年長者から知識やスキルを学び、一人前になるような訓練を受ける過程を経てこそ、青年期の発達課題が達成されることを強調しており、且つ、この過程は、「恐ろしいほど切迫感を伴って、若い人々に選択や決心を強制」すると述べている(p.124)。青年期に凝縮されている重要な意思決定(進路選択、職業選択、親との関係のとり方、恋人やパートナーの選択など)の機会は、後戻りできない覚悟と決意を青年に

迫ることを通して、結果として、明確な自己定義がもたらされ、自分の人生への真摯な関与へと青年を導くと言える。

この時、即ち、“切迫感”“軽く撤回できない意思決定の数々”という青年の心理的危機の時にこそ、周囲からの承認と一貫した支えが不可欠である。これについて、「その若者の成長と変化が、その若者にとって重要な意味を持ち始めた人々にも重要な意味を持つという仕方」「一人の人間として」受け容れられ、承認されることが、この心理的危機を支え、救い、青年の成熟を促す、とエリクソンは指摘している(p.125)。ここで「周囲の社会からの承認」とは、文字通り、青年を受容し、理解し、認めるという意味とともに、「社会が若いメンバーを『同一化』し、彼らのアイデンティティの発達に貢献する行為」(p.191)であることを確認したい。

さて、以上のように、青年期の自我同一性確立における社会的承認の必要性が論じられているが、若者を受け容れて承認する主体に関して、エリクソンは、著書の中で「周囲の人々」「若者にとって重要な意味を持ち始めた人々」「社会」「属している共同体」「属する文化(圏)」、さらには「国家」や“歴史的時代性”をも含みこむ「(青年が生きている)多層的な環境」に至るまで、幅広いレベルで言い表している。

支え手となるのは、周囲の人々や重要な他者など直接的に関わる身近な人物は勿論であるが、若者に受容と承認を与え、それと表裏一体的に「与えられた役割に従うように」「同一化に導く」のは、「ごく近隣の地域」「志望する職場の場」「同好の士の集い」(p.126)から“文化や歴史的時代精神、価値観、社会の信念体系”にまでわたる。

結論として、青年の自己確立は、所謂、Bronfenbrenner(1979/1996)の言う“マイクロシステムからマクロシステムに及ぶ多層的な環境”からの受容・承認、応答を通して、真に実現される、ということとなる。

2. リクルールの自己同一性概念における「同一性」「自己性」について

さて、エリクソンの「斉一性」「連続性」の定義には、自己の独自性や確固たる自分らしさということは直接は含意されていないなど、いくつかの考えるべきことが残されている。

そこで、以下では、エリクソンの自我同一性の概念を相対化するために、リクルールの「自己同一性」の概念に着目しつつ、自分らしさの探究に関する(エリクソンとは)異なる視座を概観しつつ、理解を深めていきたい。

まず初めに、リクールの概念は「自我同一性」ではなく、「自己同一性」である。このことについて、『他者のような自分自身』の訳者である久米は、同訳書の訳者あとがきとしての解題の中で、(本書が)「私(je)や自我(moi)」と言わずに敢えて「自己(soi)」を採用しているのは、『私は考える(コギト)』におけるように主体が無媒介的に直接に措定されるのを避けて、主体を反省的、間接的に捉えるため』であると解説している。そして、リクールの研究が「ある種の主体の哲学の再建をめざすものであるとしても、それは断じて<私>という主体の哲学」ではなく、「血肉を持った私」という実在についてではないことを強調している。

事実、リクール自身、(日本語訳書へ寄せた)「日本語版への序文」において、誰もが自らにとっても透明ではない「主体」について、分析的客観化と反省的な思考を通してこそ到達できるレベルの認識を特徴的に表すため、それを「自己(soi)」という用語で指し示していると説明している。自身にとっても決して透明ではない「自分」に関する認識は、直接辿り着けるような直観的な知などはなく、言語を介した反省的な眼差しによってこそ接近でき見いだされる、とするのがリクールの立場であり、換言すれば、リクールの研究は、自己・反省的に見いだされる自分らしい主体の在り方の探究であると言える(川崎、2008; 松尾、2005)。

このように、自分自身についての客観的・反省的な認識として到達する「自己同一性」の考察において、リクールは、まず、「同一としての自己同一性(=「同一性」)」と「自己としての自己同一性(=「自己性」)」を区別している(リクール、p.4)。

「同一性」とは、他者と明確に区別・弁別される「一貫・不変の同一人物としての実体」を指し示すものであり、例えば、固有名詞や遺伝的資質(指紋、DNA 型など)の構造、性格特性のもっとも安定した様相などで特定される同一性の次元である(リクールの序文 p. x iv)。つまり、「同じ人であること」を意味するもので、時間・空間横断的で、状況・状態に関わらず不変の存在としての同一性次元である。

他方、「自己性」とは、「私は誰か?」に答える次元のものであり、独自の自分らしさとは何か、どういう生き方が自分にはふさわしいのか、自分にふさわしい在り方とは何か、などの問いへの答えとなるものであり、一部、個人の気質特性・性格特性をも含む次元であると考えられる。

この意味では、前述のエリクソンの「斉一性」と「連続性」概念は、リクールの「同一性」概念にほぼ回収されると考えられ、他方でリクールの「自己性」に対応するものは、

エリクソンの自我同一性の構成要素には無い。それは、エリクソンが、社会適応や問題解決に貢献する「自我」の自律的機能を重視しており、自我同一性の確立の際に、それを下支えする「自我を統一する秩序」としての「斉一性」「連続性」を提示しているからであると考えられる。

さて、リクールは前述の「同一性」の構成要素として、「数的同一性」「質的同一性」「中断されない連続性」「時間における恒常性」の4つを挙げ説明をしている(p.157)。「数的同一性」とは、例えば、固有の名前で指名される一人の人が、二度、三度・・・n度と指名されても、指し示すのは「同じ一人の人」であるという、唯一性を意味する。また、「質的同一性」は、代替可能、代入操作が成立する同質性を意味する。そして、「中断されない連続性」とは、赤ちゃんから老人になってもその人自身は同じ人であるように、発達の第一段階と最後の段階の間の、中断・分裂のない「連続性」を意味している。この「中断のない連続性」を基盤として、4つ目の「時間における恒常性」が成立するのであり、このような「同一性」概念により、「時空を超えて不変で唯一のまとまりのある存在性」が担保される。そして、リクールは、一人の人の「同一性」を示す際、これら4つの要素を合わせ持つものとして「性格」を挙げている。リクールによれば、性格とは「個人を同一人物として再同定するのを許すような弁別的なしるしの集合」(p.154)、「個人が再同定される永続的な性向の集合」(p.156)としている。

取り巻かれる多様な環境内での固有の経験を通して形成される固有の習慣や、周囲の他者への同一化などを通じて、そして、それらにかかる時間を経ながら、個人の「性格」は形成・維持される。それ故、自己の「時間における恒常性・連続性」に力点が置かれ、且つ、この性格特性は、ある人を他の誰とも同定できない唯一の人として他者と弁別する(弁別的なしるし)とともに、その特徴は、その人独自の経験を通して身につけた習慣の数々が永続的な性向となり、その結果として「その人らしい性格」「その人にふさわしい特徴」として形成されたものである。この意味で、性格特性は、「同一性」と「自己性」を包含し合う(p.153)、または「自己性が同一性と識別・区別されない」(p.155)“重なり”でもある。そして、この“重なり”は、自己の一貫性・不変性・時間における恒常性に力点が置かれる限りにおいて、「自己性」は「同一性」にほぼ回収されてしまうのであり、「自己性」に内包する不変性の側面の極を示している。

しかしながら、「自己性」は、時間を経て変容していく含みをも有しており、つまり、年齢や経験、その時の環境要因、想定外の出来事などにより、「自己性」(自分らしさ、個

性)には当然、変容可能性が伴うのであり、そこにおいては、時空を超えた一貫・不変性にはさほど力点は置かれない。それは、むしろ、“その都度”まとめ上げられる反省的な意味作用により得られる自己認識を指し示すものと捉えられる(萩原、2006)。

また、人は、誰しも、自分にふさわしい在り方・自分らしい生き方についての明確な確信は持ちづらく、現実的には、迷いと不安を抱えつつ、行きつ戻りつ前に進む。

では、このような「自己性」の変化可能性及び“揺れ”のある不安定な次元に、自分らしさ」としての安定性を与えるのは何であろうか? 「同一性」に回収されない「自己性」の“ぶれない芯”は何か? 「自己性」の不確実性をどう乗り越えるべきなのか?

3. 「自己性」の維持としての「約束すること」

リクールは、自己の存在に時間的恒常性を与えるものとして、前述の「性格」の他に、「約束を守ること」「約束した言葉への忠実を守ること」による「自己性」の維持を挙げており、前述の問題の回答としている。

その都度の行為主体であり、状況により様々な役割を担う「私」の「自己性」は、ただただ、他者との関係性に開かれ、他者への約束を守ること・守り抜くこと、その行為と決意の一貫性によってこそ維持できる、ということがリクールの主張である。

「約束を守る能力は、経験、信念、計画などの変化が及ぶ、及ばないにかかわらず、自分を維持できることを前提としている」(日本語版への序文)と書かれているように、人が生きていく過程の諸々の変化のなかで“時間を経ても変わらずに約束を守り抜くこと”は、自己存在の(変化にあっても貫かれる)時間的恒常性=自己維持を意味している。

「性格の恒常性とは対極に位置づけられる、時間における恒常性の一様態」(p.159)であるとされる「約束を守ること」は、たとえ外的環境や内的状態に変化があったとしても、他者からの信頼に応える義務を「私」が負っていること、他者から頼りにされていることへの「私」の責任ゆえ、守らなければならないのであり、ここに至ってリクールは「自己性」の維持に倫理的責任性を付与している。「性格」と「約束を守ること」が、共に自己同一性の「時間における恒常性」を示す様態であるとしても、リクールが例に挙げているように、「性格を維持すること」と(信頼に基づいた)「友情を変わず保つこと」とは別であり、「性格を維持すること」と「約束したことへの忠実さを持続すること」は別である(P.158~159)。つまり、リクールの自己同一性における「自己性」は、自分の行為の責任を引き受け、他者との関係性に開かれながら他者の呼びかけに応答し、他者との約束を

守る“道徳的な主体”に最も力点が置かれており、倫理性を最上位に位置づけていると言える。

4. 他者に関かれ他者に「応答する」ことと、自己同一性の倫理的次元

繰り返しになるが、リクールは、自己同一性の「自己性」について、前述のように、自己に向けられていた関心が他者に向けられ、他者との約束を守り、それを自分の義務と課し責任を持つこと、そして“自己の証し”が他者に対するものであるときにこそ「自己性」の確からしさに到達すること(松尾、2005)など、「自己性」の倫理的次元をかなり強調している。

このような他者への忠誠の強調は、さらに「他者の命令に応答すること」へと発展していき、他者の存在によって生起する自己と、そこにおける倫理的責任性を「自己性」の核として明確に位置づけている(山野、2022)。

ところで、自分らしい生き方の確立は、青年期以降、生涯を通した人生の主題であるが、社会における多様性への寛容は、逆説的に、青年や成人の生き方の探索と収斂、意思決定と行動化を難しくしている。うつ病や適応障害は、現代人の「自己性」の喪失を如実に示していると言える。

このような「自己性」の喪失、自己同一性の危機にあっても、その救いは“他者との出会い”にあることがリクールの「自己性」解釈の通奏低音となっており、それ故、たとえ自己存在の確からしさが揺らぐ中にあっても、他者に関かれ、他者と共に、他者のために誠実に忠実に向き合うことで信頼を醸成し、他者から寄せられた信頼と期待への応答として「約束を守り続ける」こと、さらには(前述のように)他者の命令に応答することが、「自己性」の真の顕れであることに重点が置かれている。

ここで、「他者への責任ある応答」「命令への応答」が、自己同一性の「自己性」の次元とどのように関連するのか、について考えてみたい。

他者からの「・・・したのは誰?」という問いに、判然と「私です」と応答することは、「置き換え不可能なものとしての自己指示」による、行為の主体としての責任性の表明である(川崎、2008)。同じく、「私」を探していたり、「私」を必要としている他者からの「どこにいるの?」と訊く問いかけに「私はここにいます」という応答は、自己性の維持を表すのであり(p.213)、責任を引き受ける「私」、倫理的自己性を有する「私」を反映している(北村、1998)。リクールは、責任主体としての自己の「自己性」は、「自分の行為によって生じた損害や、他者に与えた害などの過失への罰を引き受ける能力」を伴うもので、

「善悪の観点からの評価」を受ける主体という意味で「道徳性」を帯びていると述べており(日本語版への序文)、その態度は、「私です」「私はここにいます」という応答に凝縮されると言える。

ではここで、「他者」とは一体誰なのか?

他者とは、「友情と愛に近い関係で出会う」現前の具体的な“近くの他者”と、「一度も会ったことはないが我々の運命が巻き込まれている無数の制度における私の対応者である第三者」と記述される“遠くの他者”に二分されることをリクールは説明している(日本語版への序文)。

前者、即ち“近い他者”に対して、信頼感と忠誠を核として、その信頼に応答する責任を常に既に引き受けつつ、その他者の苦しみや呼びかけに自ずと自分の感情が向けられることをリクールは「心づかい」という語で言い表す。現前の他者をかけがえのないものとする「心づかい」は、「他者の私自身への敬意に応答するもの」(p.247)であり、ここにおいても、他者から信頼され大切にされていることには(こちら側の)“応答をする責任がある”という自己性の倫理的・道徳的次元が鮮明に表されている。

では、後者の場合はどうであろうか? 出会ったことのない第三者からの命令に応答する責任とは、何を意味するのであろうか?

リクールの「命令」とは、“・・・してはいけない”“・・・せよ”という禁止法や指令・指図ではなく、他者からの“呼びかけ”を意味するものであり、「他者とともに、他者のために善く生きるように、呼びかけられていることが最初の命令」(p.432)と記されている。遠い他者(たち)からの、そのような“呼びかけ”は“私の良心”として内在化され「私」にささやく。そのささやきは、あくまでも希求法であり、「他者のために善く生きてくれたら」「(それを)約束をしてくださいますよう」という二人称のなめらかな響きで「私(の良心)」に突き刺さる。大事なことは、「他者とともに善く生きたいという願望を持つものとして、自分自身を(自分で)評価することを自分が命令されている、と認識すること」(p.432)であり、他者と共に他者のための生き方を自分らしく貫けているか、守り抜いているかを、常に眼差しを内に向けて問い、他者(たち)の声=内なる自分の良心に耳を傾けることが自分に要請されている、と自覚することである。リクールは、この高い倫理性を「自己性」の在り方に求めてやまない。

さらに、リクールは、今を生きる我々が“歴史における過去の死者からの命令”に対して負う「応答する責任性」についても、自己の「自己性」の契機と捉え、それを「負債」という鍵概念によって論を展開している。

例えば、リクールは、「責任の概念は、過去に向けられ・・・というのは、その概念は過去が全面的にわれわれの所業ではなくても、自分の所業として引き受けようとし、われわれに影響を与えるその過去を引き受けようとすることを意味するからである」(p.364)と述べ、負うべき責任の回顧的次元に言及している。

さて、この場合の他者(“遠い他者”)は誰なのか? それらの他者に果たす我々の責任とは何なのか?

(内なる良心の声として内在化された)「命令の源泉である<他>が、私が対面できる他人であるか、・・・それとも表象のない私の先祖であるのかどうか」はわからないし、「それほど私の先祖に対する負い目は私自身を・・・形成している」(p.437)とあるように、応答する対象は、我々の先祖(たち)=過去の死者たち、そして表象のない過去の他者たちをも包含している。(たとえ死者であっても、実際に知り得ると言う意味での)他者からの命令・呼びかけのみには還元できない“見知らぬ死者たち”からの命令・呼びかけまでも含むものこそが、内なる良心の声の意味であると理解できる。

たとえ死者であっても自分に関連する人たち、例えば、文字通り、命を与えてくれた先祖たち、家族親族が世話になった人たちからは、直接・間接にかかわらず有形無形の助力・恩恵を受けているのであり、脈々たる繋がりによって現在の自分の存在があること、そしてそのことへのお返しが出来ないままであること(これからも死者に対してはお返しができないこと)は、確かな“負い目”であり、リクールはこれについて「自分が現にあるようにしてくれた人に対して、自分が負債を負っていると認めることは、自分に責任ありとすることなのである」(p.365)と示している。

このことについて、山野(2022)は、リクールの『時間と物語Ⅲ』中の「負債」概念の内容にも沿いながら、我々の存在がその起源からして過去の他者たちの存在によって初めて成立しており、且つ、過去の他者たちから受け取ったもの(助力、彼らの犠牲による恩恵など)を返せないまま(死者に対しては今後も不可能なまま)であるということの「負債」を説明している。そして、この意味において、過去の他者には、歴史における犠牲者が含まれる(山野、2022)。本稿の範囲を超えるため、この問題(歴史上の犠牲)について詳述は

しないが、つまりは、戦争や民族浄化を初めとする歴史上の悲劇の犠牲者を含む問題も「負債」概念には内包されている。

では、これら過去の死者たち＝歴史上の犠牲者たちからの命令とは一体何か？そして、今を生きる我々が負っている責任、求められる応答とは何であろうか？それが、自己同一性の「自己性」とどう関連するのであろうか？

歴史上の悲劇における不正と暴力の結果、命を落とした死者たちからの命令は「(この史実を、この悲劇を)決して忘れないでほしい」という懇願に近い呼びかけである。我々は、書物や伝承・証言、遺された建造物や遺品、写真などの象徴物を通して、その蛮行を知る時、死者からのこの命令は、「決して忘れてはならない、忘れない」という我々の義務に変わる。さらに、それは同時に「決して繰り返してはならない、繰り返さない」という未来に向けた義務ともなる。

このような、過去の死者である他者たちに対する我々の負債を認識し、且つ、未来に関する我々の判断や行動に責任を持つということが、自己同一性の「自己性」の要素を形成していると山野(2022)は言及している。つまり、過去の死者たちの貢献や犠牲の上に在る今の自分(たち)の存在を深く感受・理解するという意味で自己同一性の認識が深まるのであり、且つ、未来を生きる人のために自分(たち)の判断や行動への責任を自分らしく引き受ける、未来に向けて自分らしく生きる、という意味での自己同一性の要素を構成している、と考えられる。そして、それは、前述のように、歴史上の犠牲者からの命令への責任ある応答にまで押し広げられる。

脈々と続く歴史文化的な文脈に埋め込まれた存在、そして今とこれからを生きる存在である「私」が「他者と共に、他者のために善く生きる」ため、過去の歴史上の過ちと犠牲者の死を「私は決して忘れない」、「私は決して繰り返さない」と決意することは、自律した「自己性」の確立であり、過去を背負い、現在を生き、そして未来へとつながる「私」の自己同一性の証しであると言える。

5. 自己確立における他者と倫理性

精神分析的自我心理学派に属するとされるエリクソンは、自我の自律的機能や、社会的適応及び発達における心理的危機への乗り越えに貢献する自我の統合力を重視しており、故に、青年期以降の主体性の確立の問題は「自我同一性」という術語で理論化されている。他方のリクールは、自己の解釈学の視座から、2. で述べたように「自己同一性」という語により、主体性確立の問題に取り組んでいる。

一方は精神分析家・発達心理学者であり、他方は現象学・解釈学を主とする哲学者という立ち位置の違いは、主体性の形成・確立＝アイデンティティを共通分母として論じつつも、観点や主張の力点が異なるのは当然のことと言える。

エリクソンの自我同一性確立は、決して青年期だけの心理・社会的発達の主題ではなく、以降の生涯にわたる生き方の主題であるものの、最も優勢になる(心理・社会的な発達上、極めて重要な意味をもつ)のは青年期であり、エリクソンの生涯発達理論においても青年期のそれに焦点があてられる。他方、リクルの自己同一性の問題は、勿論、心理・社会的発達の系ではなく、「自己」の解釈学の系であり、敢えて言えば、むしろ円熟期にある者の自己性の問題が焦点なのかもしれない。事実、『他者のような自分自身』はリクル 77 歳の晩年の研究書である。しかし、本稿では、これらのことを前提にしつつも、しかし、それを越えて、(青年期以降の)あらゆる年代、世代で共有すべき“生き方の問い”として両者の「自我(自己)同一性」概念を取り上げている。

エリクソンの理論において、青年期の自己確立に際し他者や社会からの受容と承認が不可欠であることは、それが心理・社会的移行期の危機の支えと救いになるからであると共に、青年が自己満足的な自己に閉じることなく、“一人前”になれるような知識・技能習得の訓練や所属社会(の価値観)への同化・適応に導かれるため、という意味を持つ。言及の対象が青年期であるため、所属する社会の一員として導かれ適応すること(それが、同時に青年の自分らしさの確立の契機にもなっていること)が重視され、他方、迎え入れ、一人前に育て、知識・技能を伝承する年長者は責任と応答が問われ、このことは成人期の「世代性」という発達の主題として位置づけられる。

このように、他者や社会からの承認と評価、関与と導きを“受ける側”、あるいは自分が良しとする価値や信念を“受容される”側にある青年に対して、自我同一性の理論自体の中では、さほど倫理的・道徳的次元は強調されていない。

ここで、この問題について、エリクソンの「virtue」概念に着目し、エリクソン理論に内包される倫理的次元について吟味してみたい。

エリクソンは、『洞察と責任』(1964/1971)において、virtue を「人間的強さ」と規定し、発達の諸段階を通じて人が生き生きと生きれるための強さ・人格的な活力としている。それは本来、人に生得的に備わっているが、人生の各固有の時期に発達させられる必要があり、また、それが発達できるための機会や環境は社会の側が与えなければ、この活力は獲得できないと述べている。人生の各時期とは、具体的にはエリクソンの漸成的発達段階の

8 段階であり、各段階に固有の心理社会的発達の危機が解決される時に各段階に固有の virtue も獲得される、ということである。

例えば、乳児期の「基本的信頼感」対「不信」の乗り越えにより「希望(hope)」の力が獲得され、以下も同様に、幼児期前期の「自発性」対「恥・疑惑」の乗り越えによる「意志力(will)」の獲得、幼児期後期の「自主性」対「罪悪感」の乗り越えによる「目的意識(purpose)の獲得、児童期の「勤勉性」対「劣等感」の乗り越えによる「有能感(competence)」の獲得、青年期の「同一性」対「同一性混乱」の乗り越えによる「忠誠心(fidelity)」の獲得、成人期前期の「親密性」対「孤独」の乗り越えによる「愛(love)」の獲得、成人期の「世代性」対「停滞」の乗り越えによる「世話・育み(care)」の獲得、そして老年期の「人生の統合」対「絶望」の乗り越えによる「英知(wisdom)」の獲得、というように、これらの一連が発達の潜在的なグランドプランによって規定されている。そして、平均的に期待できる環境が用意されていれば、各時期・各段階で、形成や獲得が顕在化される、と理解できる。漸成的発達論に従えば、各 virtue は、その獲得が優勢となる発達段階のみで完結され得るのではなく、それ以前の段階においても萌芽が見られ、それに続く段階においてはさらに強められ、人格的な活力として高められ、強化されていくとされる。

さて、この virtue が“高められ、強化される”ことに関連して、西平(1985)は、エリクソンの『洞察と責任』などの著作の内容に沿って、virtue が人間の倫理的基礎になっていることを説明している。virtue が強化されるということは、活力のエネルギーが増強するという意味ではなく、「人間が生きるために必要な強さという目的性を含んだ倫理性を持った強さ」として理解されるべきであり(西平、1985)、また、それが本来生得的に備わっているものである限り、人間の本性において、常に既に倫理性の基盤があると考えられる。

ところで、自分の確からしさが掴めずに試行錯誤する青年は、自分の身を懸けて信じるに値する人物や価値体系、理想の社会観などを希求する。いわゆる「役割実験」を通して、自分の能力を試し、フィットする価値観を探し求めるための幾多の挑戦的な経験を通して、青年は、“自分を信じて真剣に向き合う”という意味での“自分に対する忠誠”が試される。また、自分にとって重要な意味を持つ人物、仲間、集団、価値体系、理想の社会観に対しては、そこにたとえ矛盾があったとしても、自らを賭して忠誠を尽くす。エリクソンによれば、このようなことが青年期に優勢な virtue としての「忠誠心」である。自ら

が選んだ“信ずるに値するもの”にコミットメントし、擁護するために全エネルギーを捧げる時、そこに献身と自己犠牲の強さが生まれる(仁科、1983)。忠誠を尽くす時、青年は、もはや、受容や承認を受けるばかりの存在ではなく、一心にその対象を守り、責任をもち、呼びかけに応答をする義務を負う。これはある意味、同一性形成の倫理的次元の証であると考えられるのではないだろうか。この時、重要な点は、青年が信ずる対象との約束を守り、呼びかけに対する責任を果たすという“献身の力”が、真の人格的強さと活力に結実するためには、忠誠を尽くしてコミットメントするに値する対象を青年に用意することのできる“社会の成熟性”が問われる、ということである(この場合の社会とは、青年の周囲の重要な他者、身近な集団、共同体等から、社会の価値体系、文化、時代的精神までを含むと考えられる)。

かつて青年であった成人世代は、未来を担う若者がコミットメントできる対象や社会的価値を用意し、あるいはコミットメントできる環境を提供し、見守り、育むことで、成人期自体の *virtue* である「世話・育み(care)」を獲得する。そして、やがてこれら若者が成人となったとき、青年期に受け取った助力や恩恵(負債)を返すように次世代の育みに責任を持つ。

このように、年長世代によって守られ次の世代を守っていくという世代間継承の大きな歯車と、個人固有の発達の歯車とがかみ合う中で、*virtue* は獲得されていくのであり、世代を通じて獲得が目指される *virtue* は人生の肯定的目標であり、これこそがエリクソンが求める新しい倫理の基盤であると言える(西平、1985)。

そして、年長世代が若者に *virtue* を継承していくときに、もし、過去の出来事に誤りがあったとしたら、何らかの犠牲者の上に現在があったとしたら、きっと「決して忘れない、決して繰り返さない」(リクール)と心の声が叫ぶのであろう。

おわりに

現代、そして今後のグローバル社会において、アイデンティティの多様性を真に理解するためには、過去の歴史(から引き出される自国や自分たちの負う負債)の理解や、未来への責任を引き受けることの用意など、「市民としての自己性を自ら証しする必要性」(山野、2022)がある。この意味で「自我(自己)同一性」の在り方は、青年期から成人世代自身が、自らの問題として受け取るべきと考える。

【引用文献】

Bronfenbrenner, U. (1979). *The Ecology of Human Development : Experiments by Nature and Design*. Cambridge, MA: Harvard University Press.

(磯貝芳郎・福富護(訳). (1996). *人間発達の生態学：発達心理学への挑戦*. 東京, 川島書店.)

Erikson, E. H. (1964). *Insight and responsibility: Lectures on the ethical implications of psychoanalytic insight*. New York, W. W. Norton & Company.

(鑪幹八郎(訳)(1971). *洞察と責任：精神分析の臨床と倫理*. 東京, 誠信書房).

Erikson, E. H. (1980). *Identity and the Life Cycle*. New York, W. W. Norton & Company.

(西平直・中島由恵(訳) .(2011). *アイデンティティとライフサイクル*. 東京, 誠信書房).

萩原康一郎. (2006). 物語的理解と自己同一性：ポール・リクール『時間と物語』を中心に. *文芸学研究*, 10, 21-48.

川崎惣一. (2008). リクールにおける自己の解釈学. *城西国際大学紀要*, 16(2), 57-71.

北村清彦. (1998). 繰り返される自己の物語: ポール・リクールの自己論. *北海道大学文学部紀要*, 47(1), 1-27.

松尾憲一. (2005). <自分らしさ>の探求としてのアイデンティティ：ポール・リクールのアイデンティティ論. *東京大学大学院教育学研究科紀要*, 45, 31～39.

西平直. (1985). E. H. エリクソンの virtue 概念：発達の視点と規範性の問題. *教育学研究*, 52(2), 214-223.

仁科弥生. (1983). エリクソンと幼児教育(13). *幼児の教育*, 82(1), 34-42.

Ricoeur, P. (1990). *Soi-même comme un autre*. Paris, Éditions du Seuil. (久米博(訳)(1996). *他者のような自己自身*. 東京, 法政大学出版局).

山野 弘樹. (2022). リクール『他としての自己自身』における「自己の証し」概念の再検討. *哲学(日本哲学会)*, 2022(73), 375-390.

【参考文献】

大小田重夫. (2008). 記憶と忘却: ベルクソンとリクール. *哲学(北海道大学哲学会)*, 44, 67-80.

大野久. (2021). アイデンティティ, 斉一性, 連続性概念に関する検討: 小沢氏論文に関するコメント. *青年心理学*, 32(2), 97-101.

山野 弘樹. (2022). 行為の現場としての「歴史的現在」：リクール『時間と物語』の体系的解釈を目指して. *日本フランス語フランス文学会関東支部論集*, 29, 69-82.